季刊

直江の津



◉直江津経済文化研究会◉

夏号
6,7,8月

年間特集
直江津を掘る

3 湊町から臨海工業都市へ
——直江津の産業史——

4 人々のくらしに息づく
「祇園祭」……囃子の伝承を通しての一考察

巻頭エッセイ
わたしの直江津

インタビュー
坂詰吉寛さん

知の楽しみ
妙高山 ◉◉◉現在・過去・未来◉◉◉

フリースペース
茶室見学ノート 石痩庵

ミニ特集
町屋の人形さま巡り ◉◉◉◉◉ 村上

直江の津

第二号　夏号
二〇〇一―六・七・八

年間特集

直江津を掘る

3　湊町から臨海工業都市へ　直江津の産業史　赤羽孝之……4
4　人々のくらしに息づく「祇園祭」囃子の伝承を通しての一考察　近藤美保子……9
巻頭エッセイ　世界の果て　杉みき子……3
ミニ特集　村上の底力　町屋の人形さま巡り……12
知の楽み　妙高山　現在・過去・未来　早津賢司……14
インタビュー　坂詰吉寛さん　上越コンピュータサービス……19
フリースペース　茶室見学ノート　石痩庵　佐藤昭夫……21
講　演　生活に潤いを　地元の文化を大切に　小林新治……24
読書びと　『諫早菖蒲日記』野呂邦暢著……28
見る目　シンボ凧……30
東西海陸……27
読者情報……29

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治十一年「福永家文書」）より



母と子（1979年）
岡本錻二作
国府公園
五智土地区画整理事業
竣工記念

世界の果て

杉 みき子

子どものころ、直江津は世界の果てだと思っていました。父の生地の信州松本まで、家族でたまたま出かけていたのですが、その先にも町があるとは知らなかったので、世界のあっちの果ては松本。そして、夏になるとよく海へつれて行ってもらった直江津は、松本とは反対方向なので、これが世界のこっちの果て。というわけで、まことにささやかで単純な子どもの小宇宙でありました。

当時はまだバスが通っていなかったのか、直江津へはいつも汽車で行きました。駅からゆっくり歩いて、たいていはまず水族館へ寄るのですが、そのころ水族館がどこにあったのか、記憶はおぼろです。でも、ゆるやかな坂道はしんかんとして人通りも少なく、つきあたりは風よけのよしず張り（？）で、その上に、なんともいえず美しい青空がひろがっていました。それは高田の空の色とはどこか違っていて、ああ、あれが海の空の色なんだと、今もありあり心に残っています。風よけにさえぎられた坂道のゆくてに、この別世界のような青空があったため、いっそうそこが世界の果て、という気がしたのでしょう。

おおかたの港町とおなじく、直江津も坂の多い、そしてそれが魅力になっている町です。坂とも意識せず歩いて行って、ふとふりかえると、いつのまにか街を見おろすながめになっているのにおどろかされたり、坂の途中でまた別の急な坂道が脇へ切れて、荒けずりな石段がジグザグに刻まれているので、とつぜんそこをかけ下りて行きたくなったり。そのひとつひとつの坂のゆくてに、ひとつひとつの小さな世界の果てがあるように思うのも、幼い日の夢の後遺症かもしれません。

さて最後に、またしてもこの話になってしまうのですが、せっかくの直江津という美しい地名（もちろん高田もですが）「〇〇市直江津国府」「〇〇市高田寺町」というようなかたちででも、ぜひ公的な地名として復活してほしいと、切に願っています。

（児童文学作家）

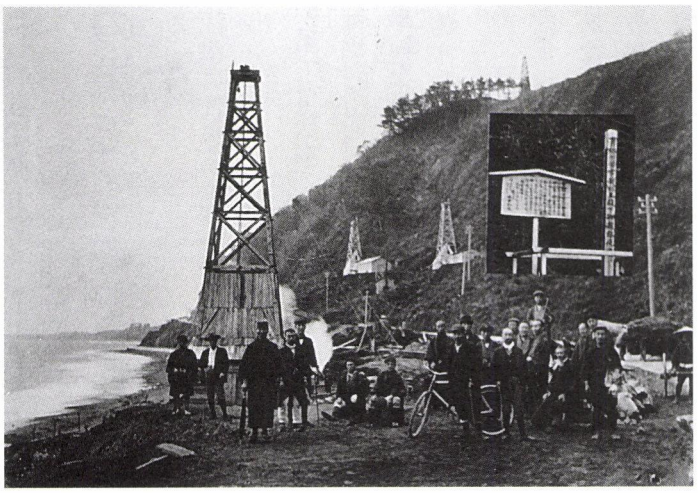
年間特集「直江津を掘る」その3

湊町から臨海工業都市へ

■直江津の産業史

あかはねたかゆき
赤羽孝之

直江津今町は湊町であり元々の産業は物流・商業が中心で、工業の方はあまり発達していなかった。ただ、中世に府内と呼ばれていた頃には武具や日用品など、職人による家内工業が見られ、職人たちの多くは信州者達だったと言われている。しかし近世に上越の中心としての高田城下町が成立して以降は、船大工など船の修理建造関係（明治初期には三〇人ほど）を除けば、近郷近在で消費される履物・畳・建具・味噌醤油・菓子などの日用必需品をつくる家内工業がわずかにある程度だった。ところで、一般に日本の産業革命は日清・日露戦争の時期とされるように日清戦争の後に工業化が急速に進み近代工業が発展した。新潟県においても近代産業をおこす機運が高まり石油採掘ブームが広がった。以前からの草生水採取の企業化が図られたのである。そして明治中期には、新潟県では尼瀬・西山・東山などで石油が活発に掘られ、上越では板倉・清里や牧村、郷津で油田が開発された（明治二十三年には県内に石油採掘会社が四三〇もあった）。それまでの行灯・提灯に代わって石油ランプが用いられるようになり、各地に小規模な製油所が出来、石油の小売店が街中に生まれたという（しかし明治末頃から石油があまり出なくなり、大正の初め頃には止めた会社が多かった）。



大正時代の郷津油田



インターナショナル・スタンダード直江津製油所

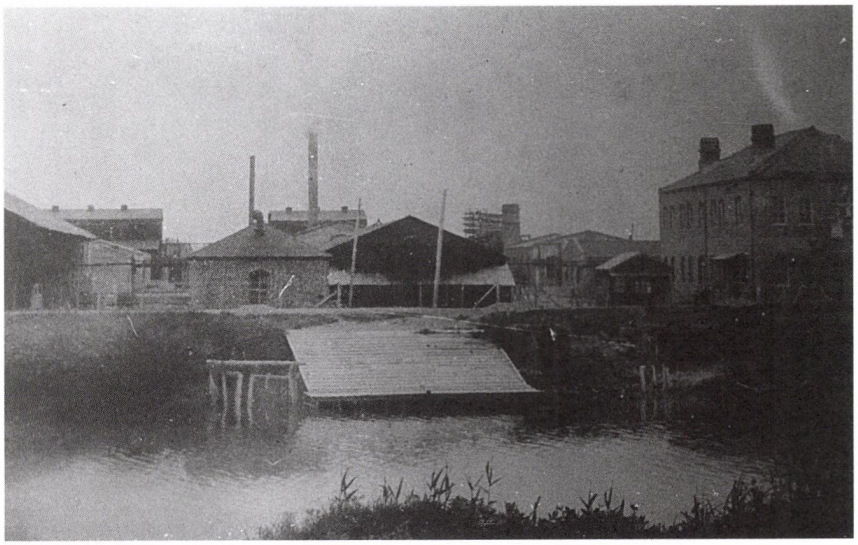
そこで、北海道開拓使の一員として明治初年に日本に招聘され、日清戦争時には駐日ア

メリカ公使にもなったエドウィン・ダンは、港や鉄道に利点をもつ直江津に目をつけ、そこに石油精製工場を建てることを決意した。そして、そのための資材を積んだ汽船ハドソン号は、明治三十三年に直江津港に入港し、関川右岸の郊外（現在、信越化学が立地している土地、約七万九千坪）にインターナショナル直江津精油所の建設を始めて、工場は翌年に完成した。この会社は資本金一千万円で当時は東洋一と言われ、地元の人たちは「インター」「スタンダー」と呼んだという。これが、直江津にとっての最初の近代的大工業であった。そしてエドウィン・ダンが総支配人になり、黒井の松原に木造二階建ての洋館の社宅（異人屋敷）を建て、二十数名のアメリカ人技師が居留した。

このスタンダード会社ができた事によって、当時の地方には珍しい西洋料理店が直江津の町に生まれ、野球・テニスが県下で初めて行われたという。

また原料の石油は上越各地の油田からだけでなく中越の西山油田からも集めて使ったというが、この会社は、米国本社の方針転換、資源的理由などで明治四十年に工場設備を日本石油に身売りしてしまい、七年間で姿を消した。また、日本石油の製油所も、資源的な問題から大正十二年頃には閉鎖されてしまう。しかし後に次々と、この製油所が契機となって直江津や上越地方に近代的な大企業が進出することになる。

■エドウィン・ダン（1848－1931）
米国人。1873年、政府の招きで北海道開拓使の一員として来日。外交官として日清戦争講和条約の締結にも尽力。1900年、外交官を辞め直江津にインターナショナル石油会社を設立。東京代々木の自宅で死去。84歳。子供は直江津小学校に通学。次男ジェームスは直江津小学校の校歌を作曲したことで有名。



左 インターナショナル直江津精油所
手前は保倉川（日本石油へ売却後の絵葉書）

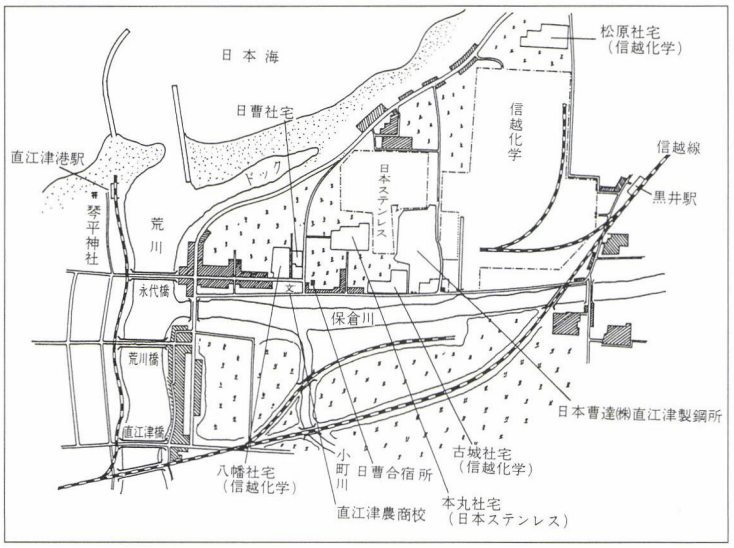


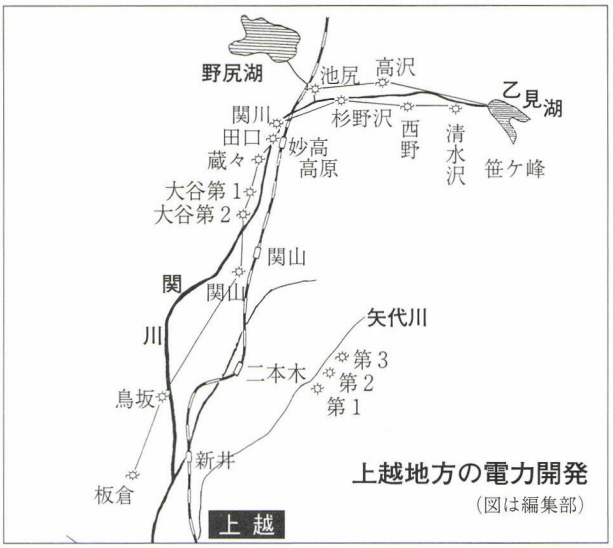
関川水系の電源開発

日本海側の北陸地方は背後に日本の脊梁山地をもち、降雪量が大きく積雪期間も長く、水力発電にはもってこいの地理的条件をもつ。北陸地方各河川の電源開発が明治末期から始まるが、妙高火山群を水源とする関川の電源開発は二社によって行われた。

先ず、信州の製糸資本による電源開発についてであるが、明治三十年に小坂善之助によって長野電灯㈱が設立され、翌年、長野郊外に水力発電所を稼動させた。その後、明治三十六年には須坂の製糸家・越寿三郎によって信濃電気㈱も設立され、三十九年には関川水系に高沢第一発電所を建設しカーバイド等の電気化学にも進出した。この北信の二社は後に競合関係になるが県知事の斡旋で協調関係をつくり、長野電灯は配電を主に、信濃電気は発電・電気化学を主にするようになった。大正に入ってからは信濃電気は杉野沢発電所や柏原にカーバイド工場を建てた。しかし第一次大戦後の恐慌期から製糸業は不振に陥り、また地方の電力業界も統合化が進む。そこで、信濃電気は電源開発と電気化学に新しい進路を見出すのである。

一方、新潟県側の上越資本による電源開発については、明治三十九年に高田に上越電気㈱（後の中央電気）が和田村の金子伊太郎らによって設立され、四十年に名香山村蔵々（妙高高原町）に五百キロワットの水路式発電所を国友末蔵が中心となって完成させた。そして新井・高田・直江津に電灯線が引かれ





上越地方の電力開発
(図は編集部)

四十年五月には炭素線の電灯がともされた(八千浦村は大正四年)。高田の町では杉のアーチが建てられ電球のイルミネーションが点灯され大勢の人出で賑わったという。この頃、高田に第十三師団が入城し市制施行で近代産業熱が高まり、農村電化も進められ、電線はその後に次第に村々へも広がっていった。電気が普及するにしたがって石油ランプは次第に姿を消していき、モーター動力として使うことも広がる。その後、上越電気は余剰電力……当時この地方では、豊水期の産業用電気は全国平均の1/3の値段だった……を活用するため電炉工業・電解工業(燐・カーバイド・特殊鋼・苛性ソーダ等)を誘致した。また早川・佐梨川(小出町)などの電源開発を進め供給地域が糸魚川～飯山と拡大したので明治四十五年に社名を越後電気㈱と改称した。大正十一年には製糸の片倉財閥傘下の松本電灯㈱と合併して中央電気㈱となり、東京まで電気を送電するようになった。また、昭和九年には野尻湖に池尻川揚水発電所を作っている(その後、第二次大戦中の電力統合で日本発送配電㈱に統合され、戦後は東北電力㈱になる)。



電力会社による電気化学・電気製錬への進出

前述のように、新しい電気化学に活路を見出した信濃電気は、空中窒素固定法による石灰窒素・硫安等の製造技術をもち、その分野で先行し九州を本拠地にする日本窒素と提携、3対2の割合で出資して大正十五(一九二六)年に信越窒素肥料㈱を設立、本社を長野市に置き社長には越寿三郎が就いた。その際、工場の立地場所の選定が問題であった。信濃電気が既にカーバイド工場をもっていた柏原などが検討されたが、結果として、直江津の日本石油の製油所跡地を約十八万円で購入し工場を建てることになる。

直江津は北陸の海陸交通の要衝で、東京と結ぶ信越線は明治二十六年に開通していた。二、三万坪の土地を探していた信濃電気には大きすぎる敷地であったが、直江津・大潟・八千浦の三町村の積極的な誘致運動もあって全てを購入した。使用電力は高沢第二発電所を建て信濃電気が供給する形であった。そして上越側の中央電気との間に配電で摩擦が生まれたが逓信省が間に入って解決した。また石灰石の原石は親不知の黒姫山とし、原石搬出の索道や船積施設などが設けられた。当初、直江津の工場は日本窒素の水俣工場に習って建て生産計画を年産二万トンとした。主な施設は電気炉六基・窒化炉二十四基で、日窒は二百四十人の技術者・熟練工を直江津に派遣し、総従業員千三百人(うち七百人は臨時雇用)であった。そして昭和二年十月カーバイド、十一月には石灰窒素の製造を開始した。しかし時代は昭和恐慌へと入ってゆく時期で、利益を上げたのは昭和四年上半期だけ、農村不況の激化で石灰窒素の在庫は増えてゆき赤字経営になってしまう。そこで信越窒素肥料は操業停止と従業員解雇を実施、また工場施設は五年間の貸工場とした。昭和七年に日本曹達㈱、理研マグネシウム㈱、電気化学㈱の



前ページの右図は関川水系の電力開発の様子。左は昭和17年当時の工場の配置図（大平洋特殊鋳造株式会社「60年のあゆみ」より）。
右の写真は昭和20年代後半の直江津上空。前ページの工場配置図と見比べることができる。

三社に貸与された。そして昭和十二年には長野電灯と信濃電気が合併し長野電気㈱になり、再び直江津で自営による石灰窒素の生産再開に漕ぎつけた。そして戦時下では肥料は統制されたが、むしろ食糧増産のために生産増強が求められ肥料の生産量も増加し続ける。しかし十二年に三社への工場貸与契約は解除されたが、黒鉛電極や特殊鋼を生産していた日本曹達直江津工場だけは、事業の発展により信越窒素肥料の敷地の一部と隣接地を購入し、十四年には日曹直江津製鋼所と改称し、特殊鋼など合金鉄の生産に展開、戦時中は二十五粍機銃弾帯などの軍需生産を行った。その後、日曹製鋼・大平洋金属・大平洋特殊鋳造㈱と改称して現在に至っている。また、信越窒素肥料も昭和十五年に現在の信越化学工業㈱に名前を改めている。

一方、上越資本の中央電気は、明治四十二年に燐・カーバイドの工場を誘致、大正三年には買収して特殊鋼生産にも展開した（現・中央電気工業）。さらに、大正九年には日本曹達が中郷・二本木に進出（日曹は戦前期に自社の四発電所を矢代川等に建設）、また昭和十年には電解工業の大日本セルロイドが新井に進出した。前年の昭和九年には中央電気は秩父電気の技術を導入して余剰電力利用の電炉工場として日本ステンレス㈱を設立した。工場の立地場所は三候補地があり、誘致合戦が繰り広げられたが、北海道産のクロム鉱の運搬、日本海側の砂鉄などの利用、土肥善三・直江津町長らの誘致努力で、結局、直江津に決定する。用地は古城と高崎新田にまたがる二万四千坪であった。当時の買収用地は、荒野原に磯馴れ松が三十本ほど立ちわずかに残る福島城の土塁にはススキが風になびいているといった風情で、その間に黒井への県道と、建物は旧国立の種痘研究所四棟があるだけだった。工事着工は九年十月、完成は十年七月、工員六十名でステンレスの生産を開始した。最初の頃の製品は鋼塊だけで板や棒への加工は外部の工場に依頼し、洗面器やパイプ・洋食器・刃物の材料として使われた。その後は神戸製鋼所と提携し大阪にも進出、海軍の指定工場としてバルブ等の鋳物・鋼管や鋼板の圧延にも進出、十二年には長野県に松本工場をもち、戦時中は主に海軍工廠のタービン翼材・魚雷部品などを生産、十六年には海軍の斡旋で住友金属と提携し関連企業になった（現・㈱住友金属直江津）。



おわりに

直江津に大規模な工業が進出した理由（立地条件）として以下の点が上げられよう。

- 直江津の地は港をもち、また鉄道・幹線道路の分岐点でもあり、交通の要衝であること。
- 関川水系の豊富で廉価な電力。
- 西頸城・青海町の黒姫山の豊富な石灰石資源。
- 工場用地と工業労働力（港近くの保倉川沿いの低湿地に未利用地があり、また、都市部の非農業人口や近在の労働力を鉄道等を通じて吸収できたこと）。



大陸に開かれた直江津港

このように大正の終わり頃から昭和初期にかけて次々と大工場が直江津郊外の関川右岸に進出したのであるが、エドウィン・ダンのインターナショナル石油が契機となって、現在の工業都市の基礎を開いた。すなわち砂丘背後の広漠たる原野に明治期に東洋一の精油所ができ、大正末までは日本石油が、昭和に入って信越窒素肥料（信越化学工業）が、日本ステンレス（住友金属直江津）・日曹製鋼（大平洋特殊鋳造）が、戦後には三菱化成が立地したのであり、このような産業上の展開が、直江津今町の、旧来の港湾都市から近代的な臨海型工業都市への転換を意味していたと言うことができよう。



直江津への提言

（今年二月二十二日に直江津地域活性化フォーラムがHハイマートで催された。その際、私はパネリストとして発言する機会がありましたが、再び意見を述べます。）

まず、直江津の人達は自分達の町の歴史と風土を素直に認識することが大切ではないかと思う。前述のように、直江津は明治末期から戦前そして高度成長期まで、臨海型の重化学工業の町あるいは鉄道の町として歩んで来た。その事によって、湊町から工業都市への大変化があったが、逆に、海の存在を忘れ「海に背中を向けた町」になってしまったのではないのだろうか。現在、郊外に大規模な商業地ができ、住民も郊外へ転居し、直江津・高田の町はかつてとは違って空洞化し寂れている。しかし中世・近世以来の長い歴史をもつ二つの町の活性化が図られねばならないと思う。そして考えてみれば、直江津が郊外の商業地・住宅地に対して真に勝るのは「歴史と風土文化」しかないのである。信州など内陸から大勢の人達が海を見に、海水浴に来ている。この人達の「海や海外への想い」を直江津は満たしてやっているだろうか。また現在、直江津港は北海道・九州・佐渡だけでなく釜山・丹東とも航路をもち、上越が海外と繋がっている唯一の窓であるが、その事を感じさせる町になっているのだろうか。近い将来、国際化はさらに進み環日本海交流の時代が来るであろう。もう一度、直江津が海辺の町、湊町であった事実を認識し、歴史を振り返り、自分達の「海と港」の歴史を愛する処から始めなければならないと思う。



上越教育大学 社会系 教授　昭和22(1947)年長野県松本市に生まれる。
学歴：40年県立松本深志高校卒業　44年東京教育大学理学部地理学科卒業　50年東京教育大学大学院 博士課程(地理学)修了。
職 歴：50年筑波大学地球科学系研究教育補助員(助手)　52年鳥取大学教育学部講師　57年上越教育大学助教授　平成5年同大学教授　現在に至る。
専門分野：経済地理学、農村工業、地場産業、地方における工業史、農家兼業などの研究を行っている。
著書など:平成元年『現代社会の地理学』古今書院（山本茂と共編著）2年『地方工業の研究』山越企工（西山耕一と共著）9年『バテンレースと細幅織物』上越市史編纂委員会　12年『中部 地図で見る百年』上越・小千谷を分担執筆。

年間特集　その4

人々のくらしに息づく「祇園祭」

■囃子の伝承を通しての一考察

こんどうみほこ

近藤美保子



現在「上越祭り」と呼ばれているが、直江津地区では本来の「祇園」の名称で親しまれているので、ここでは「祇園祭」と呼ぶことにする。

「祇園祭」については種々述べられているが、本稿では囃子の伝承に焦点を当てていく。



「祇園祭」の囃子

囃子の構成は、大太鼓、小太鼓、笛、鉦である。その種類については、進行中は「行進囃子」、停止しているときは「止まり囃子」、御饌米奉納後は「戻り囃子」と呼ばれる囃子である（以下、行進、止まり、戻りとする）。

行進は、全体的にゆっくりとした調子で、「祇園祭」の囃子の基本の形になっており、囃子を習う者はまずこれを最初に習得する。止まりは行進に比べて速く、笛の装飾音も入り華やかな調子である。以前（戦後間もない頃）は「行進を速くする」と止まりになるといわれ、太鼓は速うちと呼ばれていた。現在は、笛に関しては、行進では一つ一つの音をきちんと吹くところを、止まりでは「流して（のばすようにして）」吹いている。戻りは、盆踊り唄「いたこ」の調子を笛で奏するものである。



囃子の練習

現在、「祇園祭」に参加する町内は十九あり、七月に入ると囃子の練習を開始する。近所の公園や広場、町内会館等から祭り囃子の音が聞こえてきて、祭りのムードが高まってくる。

練習は、青年会や振興会が中心となり、小学生から（町内により異なる）中学生、高校生が参加する。普段は屋台会館に置かれている太鼓はこの時期各町内に運び出され、主に男子が教わる。この辺りでは、「太鼓た（は）たき」と言い、「打つ」とはまた違った思いを感じさせている。たたき手は大太鼓、小太鼓それぞれに列を作り自分の番を待つ。青年会の人が後ろにまわり撥をもっていっしょにたたいてくれたり、脇に立ちたたく動作をして見せてくれたり、「ドンコドンコ」などと言いながらリズムをとったりしている。さらに自分

でたたいて見せて、構え方や撥の持ち方、腕の動かし方、強弱のつけ方、次のたたき手との交代のタイミング等を感じ取らせている。

笛は町内の世話役や青年会の人が女子に教えている場合が多い。しかし近年は教える人がいなくて、他の地域に引っ越した人が手伝いに来りしているところも見られる。練習ではいっしょに吹きながら音の高さを感じたり、指使いを覚えたり、音の切り方、のばし方、チャリの入れ方などを学んでいく。笛でも太鼓でも少しでもできるようになると、まわりの人からさかんにほめられる。まわりの人とは近所のおじさんやお姉さんであり、お互いに生活を通した付き合いがある。このような共同体の中で育て合っていくという意識が教える側にも教わる側にも感じられる。

このように口頭伝承により、また見よう見まねで練習しているが、平成九年度からはそこに「祇園祭協賛会」の作成した楽譜が提供され、それを参考にする姿も見られた。



ハレの日の囃子

七月二十六日夜は荒川橋に十八町内の屋台が並び（昭和五十年ころから）、高田から船で戻ってくる神輿を迎える。地元では「祇園迎え囃子」と呼び、それぞれの止まりを奏する。酒も入り、自分たちの町内をさかんにアピールするかのように、しだいに力が入っていく。

二十七日からは、屋台が各町内を巡行し、巡行中は行進を奏し、町内の各地で適宜停止し、番所（若衆宿）では少し長い休憩をとり、その間止まりを奏する。

最終日の二十九日は午後七時頃から、各町内の屋台が奉納順に八坂神社へ御饌米を奉納する。参道前に到着した屋台からは止まりが聞こえ、紙吹雪をまいたり、派手に声を掛け合ったりして次第に盛り上がり、御饌米を奉納する頃には最高潮に達する。

奉納後は一斉に歓声を上げ、その後、「戻り」で一転して静かに各町内へと帰っていく。



囃子に対する人々の意識

「祇園祭」はそこに生きる人々にとってどのような意味をもっているのであろうか。祭り（特に囃子）に対する受けとめ方について地域の方々へのインタビューを通して探っていく。（平成九年七月「祇園祭」に関して直江津地区において地域の方にインタビューした）

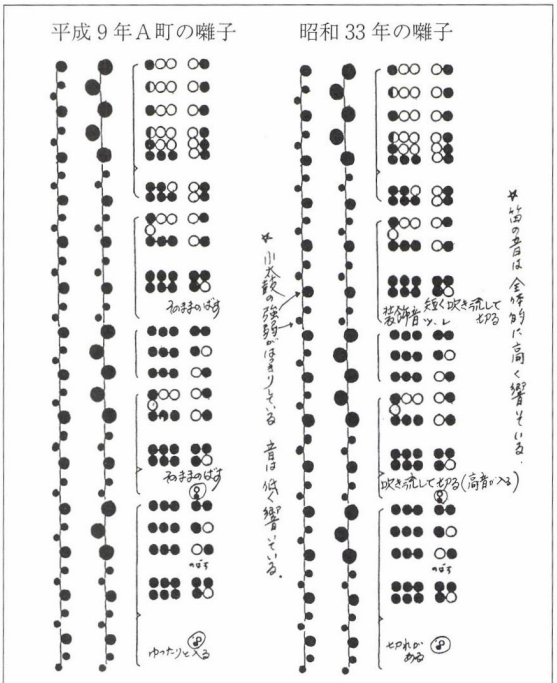
平成九年は十九町内の囃子について昔のもの（昭和三三年の録音テープ＝戦中・戦後、中断していた囃子が復活し始めたとき、記憶を呼びもどすために古老の囃子を録音したもの。当たり前の事ながら、当時も個々の違いがかなりあった。たしかに伸びやかで優雅な感じである）に統一しようという動きが古老から持ち上がり、そのことに関する反応が多く見られた。天王町で笛を教えていた男性（五二歳）は「我々自身混乱している。去年までの調子が頭にあるから、それを直そうなんて、もう二十数年も吹いてきたから……」。数年前にこの町内を離れたが手伝いに来ているというこの男性は、統一化に戸惑いを感じながらも、「うちの町内は基本的にはこれといっしょ、二、三の町内がリズムが違うのでもとからあるものにしていこうと始めたものでしょう」と、基本的には同じ囃子だが、チャリの入れ方や流し方が違っていることを指摘していた。

統一化を提案した古老も同じように「屋台を持ってから比較的新しい人たちは我流でやっているわけです。笛とか太鼓とか何も土台がないわけです。だから崩れてしまう」と嘆き、主に次の三点を変更したいと語った。

ゆっくりと
よけいなチャリを入れない
吹き流して切る

そのためか新進の善光寺浜の子どもたちはさかんに「ゆっくりする」ようにたしなめられていた。しかしその青年会の人たちもハレの場、特に二十九日の御饌米奉納では相当に速くたたいていた。このことはどの町内にも言えることで、あの高揚した雰囲気の中でゆっくりとチャリも入れずに奏することは、今となっては場にそぐわないようである。これが時代の流れとすると、「現在ある形」を受け入れていくことも必要なのではないだろうか。

旭区で笛を教えていた男性（六七歳）は、「楽譜は見ても分からない。我々の頃は楽譜なんてなかったもん」と、吹く姿を中学生に見せながら練習していた。中学一年の女子は「チャリの入れ方が違っていて難しい。自分のところのがいいけど、聞いていて好きなのはあけぼの」と言い、友達の中でもそれぞれ気に入った囃子があり、それだけ関心のあることが推察される。旭区の主婦（三六歳）は「前はどこの町内も同じに聞こえた」と言い、「聞き慣れてきたせいか、今は自分の町内のがいい」と続けた。本町の商店主の女性（六



S33年版では、大太鼓・小太鼓・笛の音が微妙にずれるところがあり、趣きとメリハリが感じられる

二歳）は本町だけが山車である由来を語り、「うちの（町内の）笛はゆっくりで品があって好きだ」とこれも自分の町内への愛着が強いことを伺わせる。あけぼの町内の女性（四七歳）は、「祭りが終わると何もなくなり、夏も終わりという感じだ」と語る。直江津地区の人々にとって「祇園祭」がいかに生活の中に占める割合が大きいかを感じさせる言葉である。

　このように自分たちの「祇園祭」を大切にしている直江津という郷土において、すべての町内の囃子を昔のものに統一することには次のような疑問が沸いてくる。

・各町内で育んでいる音を否定することになりはしないか。

・昭和三十三年の音をこの時代にもってきて受け入れられるのだろうか。

　小泉文夫は『日本の音』の中で民俗芸能の価値について次のように述べている。「（前略）受け継いできた若い人は、自分たちの好みによって、さらに発展させ、創造的に形を変えるということが許されているのです。こうした主体的な伝承こそほんとうの民俗音楽の命だと言わなければならないと思います」。この「主体的な伝承」ということを「祇園祭」の事例で考えると、囃子が速くなったりチャリを入れたり、紙吹雪を撒いたりするということになる。現在の伝承の姿に逆流するかのような囃子の統一化の動きは、「昔の囃子が正しく」それに戻そうと言う考え方からきているように感じられる。しかし、どの囃子が正しいかということになると、長い「祇園祭」の歴史の中で、わずか四十年ほど前のものが唯一のものだとは言えないのではないだろうか。伝統は形を変えて、今現在受け継がれているものの中に息づいているのである。

　しかし一方で、次のような声があるのも事実である。直江津地区では街の中心の人口が減少し、それに伴い「祇園祭」においても伝承する人、される人ともに他の地域から借りてこなければならない状況も起こっている。

　祇園囃子研究部会の練習会に参加していた町内会長は伝承の現状について次のように語っている。（要約）「この町内では青年会の中に笛の分かる人がいなくて練習に窮し、以前この地域に住んでいた人の中から、笛のできそうな人を何人か頼んで教えてもらってきた。ところがそれぞれに教える内容が異なり、そのためについには我流で練習するような状況になった。そのまま今日に至ったので、それがこの町内の囃子になっている」。

　「我流で練習」してきた結果であっても、その町内に伝承された囃子であることに違いはない。しかし、伝承過程においてこの町内のように「再び伝承し直していく」という動きがあるのならば、それは尊重すべきことではなかろうか。各町内の伝承について、「祇園祭」という枠で囲んで、同じように取り扱うことはできないはずである。各町内で少しずつ囃子が違ってきているように、今後の伝承についても考え方が異なるのは当然といえる。

　統一化がどのように進んでいくのか（またはその賛否）については、筆者の言及するところではない。しかし郷土を愛する、熱く温かい想いの流れるこの直江津地区において、どのような形で囃子を含めた「祇園祭」が伝承されていくのかについては、今後も注目していきたいところである。

（本稿は、平成十年三月に上越教育大学大学院修士論文として記述したものであり、今回その一部に加筆訂正したものである）



1958年東頚城郡大島村に生まれる
1980年玉川大学文学部卒業
1998年上越教育大学大学院修士課程修了
小学校音楽科における郷土芸能の教材化について研究
現在　上越市立南本町小学校教諭

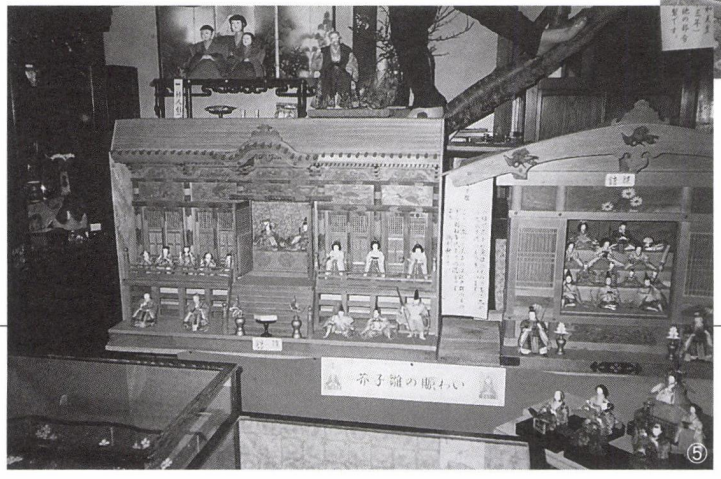
村上の底力

ミニ特集


①


②


③



⑤

第二回
町屋の人形さま巡り
平成12年3月1日～4月3日
村上市・中心市街地
主催／村上町屋商人(あきんど)会
＊9月10日～30日まで「町屋の屏風まつり」が開催される


④

何処から？　と聞かれて「上越」と答えると、きまって「えぇー、それは遠くから…」と返ってくる。横浜の人には「まあ、遠くから」で済むくらい新潟県の両端は遠い。そして静かである。鮭・堆朱・お茶・瀬波、おしゃぎり……の村上も、国道7号線の沿線には大型店が進出し、地域の消費の中心が変化しているのは、わが上越と変わらないところなのであろう。

この「人形さま巡り」、三十分も歩けばひと廻りできそうなまちに、一日いても見きれないほどの人形が飾られている。町屋そのままの鉄工所の奥であったり、肉屋の店先であったり、茶の間であったりする。内藤家五万石の城下町だから、古いものがあってあたり前といえば、そうであるが、「これは三十歳のお雛さま」という新しいものもある。ペコちゃんもいる。ウルトラマンもいる。

それにしても、人形を飾って我々を迎え入れてくれるまちの人の表情の豊かさはどうだろう。まるで何十年も前からの知己を迎えるように、見ず知らずの見学者を家に入れ、茶の間に上げて熱心に説明してくれる。「今、人形さん見に来てるから、配達は夕方にしてくれや」と、電話の相手に答えているお茶屋の主人。

これを始めるについてはそう簡単ではなかったはずである。まちの人を一人ひとり説得していった陰の人がいるはずである。しかし始めてみたら、まちの人自身が「おもしろく

町屋の人形さま巡り

城下町 村上


⑨


⑥


⑩


⑦


⑧


⑪

てしょうがない」のであって、いわゆる「まちおこし」と称した観光目的でないことがよく分かる。それが逆に二回目にしてすでに各地からの見学者を迎えることになったのであろう。ガイドマップの隅に「あそこの人形は良かったとか、これは大したことはないとか批評するのは失礼になりますのでご注意願います。楽しく続けるために」と書かれている。この気分が、やっている人たちの心であろう。

村上は、守るべき伝統を捨て日本じゅうがバブルに走った時代も、「伝統に縛られる」のではなく、日々の生活のなかに伝統と生き続けてきた。そのような底力を持ったまちなのであろうと思った。

右ページ
①②静かなたたずまいのまちは、やはり鮭のまちであった。
③家宝のウルトラマン。④軍国調の人形もしっかり残っている。
⑤捨てられたり不用になった雛飾りを長年に渡って収集したもの。
左ページ
⑥県が進める里創プランのひとつ岩船広域圏「都岐沙羅（つきさら）」の後押しで始めた茶店「穂！人（ほっと）」町屋を改造している。
⑦ペコちゃんを飾る酒屋。⑧先祖の写真も大切にされている。
⑨肉屋の店先。⑩神仏を祀る茶の間。⑪熱心に見学者に説明してくれる造り酒屋の老主人。

知の楽しみ・

妙高山

―現在・過去・未来―

早津賢二　はやつけんじ

広大な裾野を広げて雄々しくそびえる妙高は、山麓に生活する私たちはもとより、山や自然を愛する全国の人たちによって慕われています。しかし、妙高の本当の素顔は、地元の人にも意外と知られていません。ここでは、妙高山とはどんな山なのかをみていくことにしましょう。画家の大口昭治さんには、本稿のために、挿絵を描いていただきました。記して、深謝申し上げます。

妙高は〝活火山〟

妙高山は、上越地域のシンボル的な存在であるため、市町村の紹介記事や観光パンフレットの中でも、よく紹介されています。しかし、それらの中では、しばしば妙高山が休火山とか死火山として扱われています。気象庁の活火山カタログでは、もうかなり以前から、妙高山は「活火山」として分類されているのですが……。新潟県では、活火山は、この妙高山とお隣の焼山の二つだけです。気象庁では、噴火によってつくられた火山の中で、「過去二千年以内に噴火した証拠のある火山、および現在も活発な噴気活動が認められる火山」を、活火山と定義しています。妙高山は過去二千年以内に噴火したという確実な証拠はありませんが、現在も活発な噴気活動をおこなっているので、この活火山の定義にあてはまるのです。最近、妙高山を観光などにもっと積極的に活用しようとする動きがありますが、それにはまず、妙高のことをもっとよく知ることが大切ではないでしょうか。なお、昔よく使っていた休火山とか死火山という言葉は、現在ではほとんど死語になっており、特別な場合を除いては使われなくなっています。

カルデラと中央火口丘

一口に火山といっても、いろんなタイプの火山があります。妙高は、成層火山とよばれるタイプの火山です。成層火山は、中心にある火口から噴火をくり返し、溶岩流と軽石・火山灰などの堆積物が火口周辺に交互に積み重なってできた富士山型の円錐形をした火山で、日本では最もポピュラーな火山です。

妙高火山を上空から見ると、中央の最も高い山（狭義の妙高山）を中心にして、前山―赤倉山―三田原山―大倉山―神奈山といった山々が取り囲んでいる様子がよくわかります。

火山では、真ん中にある「妙高山」のような山を中央火口丘、それを取り囲んでいる前山などの山々を外輪山とよんでいます。また、外輪山に囲まれた大きな凹地のことをカルデラといいます。カルデラには、山頂部が陥没してできるものと、崩壊してできるものとがありますが、妙高のものは、後でふれるように山頂部が崩壊してできたものです。

多世代火山

火山の噴火で噴き出された溶岩や軽石・火山灰などは、雪が積もる時のように、次々と上に重なって積もっていきます。したがって、火山の生い立ちを調べるには、まず、どういう噴出物がどのような順番で重なっているかを明らかにする必要があります。それには、山体をくまなく歩き、崖に顔を出している全ての噴出物を識別し、同じものはつなぎ、違



中央火口丘「妙高山」とそれをとり囲む外輪山
私達が見る現在の妙高の姿ができ上がったのは、今から6,000年ほど前のことです。

うものは他の噴出物との上下関係を決定していくという、気の遠くなるような作業をくり返していかなくてはなりません。このようにして、どのような噴火がどのような順番で起こったかを明らかにした後に、今度はそれらの年代を決定していきます。このような作業を続けた結果、妙高火山は、長く複雑な歴史をもった火山であることが解ってきました。

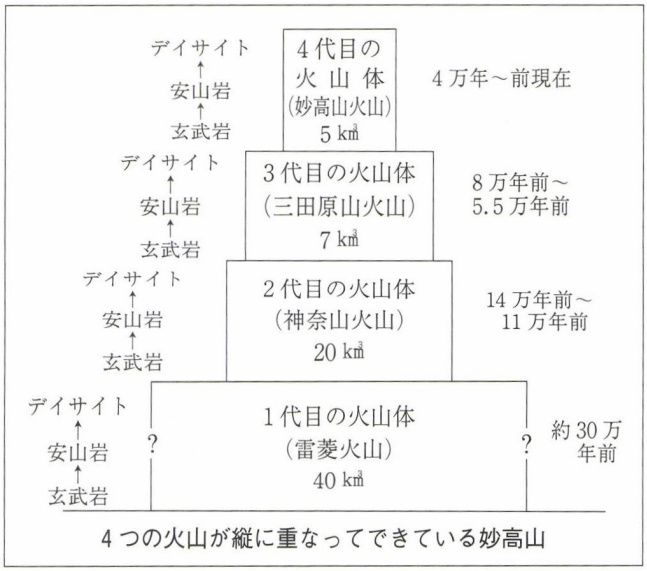
妙高火山の誕生は、今からおよそ三十万年前に遡ります。その後の活動の歴史は、第Ⅰ期～第Ⅳ期までの四つの活動期と、各活動期に挟まれた三つの活動休止期とに大きく分けて考えることができます。それぞれの活動期ごとに、噴出されるマグマは、ケイ酸分に乏しいゲンブ岩質とよばれるマグマから、アンザン岩質のマグマを経て、ケイ酸分に富むデイサイト質のマグマへと変化する傾向を示します（ゲンブ岩質マグマは誕生まもない若いマグマ、デイサイト質マグマは冷却（結晶作用）が進んだ歳とったマグマ、アンザン岩質マグマはその中間の壮年のマグマと考えていいでしょう）。そして、それぞれ標高二千五百メートル～三千メートルに達する円錐形の成層火山を造りあげました。すなわち、妙高では、噴火のくり返しによって、標高二千五百メートル～三千メートルの円錐形火山が形成されると、火山活動は長い休みに入り、やがて浸食の進んだ旧い火山体を土台として、地下深くから上昇してきた若いマグマによって次の期の活動が開始される、ということを四回くり返してきたことになります。つまり、妙高は、単純な一つの火山というより、世代を異にする四つの別々の火山が縦に重なってできている、いわば〝多世代火山〟ともいうべきものなのです。

妙高では、一つの火山の寿命が尽きても、同じ地点に再び次世代の火山が誕生するという、一見死火山の蘇生のような現象が、四回くり返されてきたことになります。

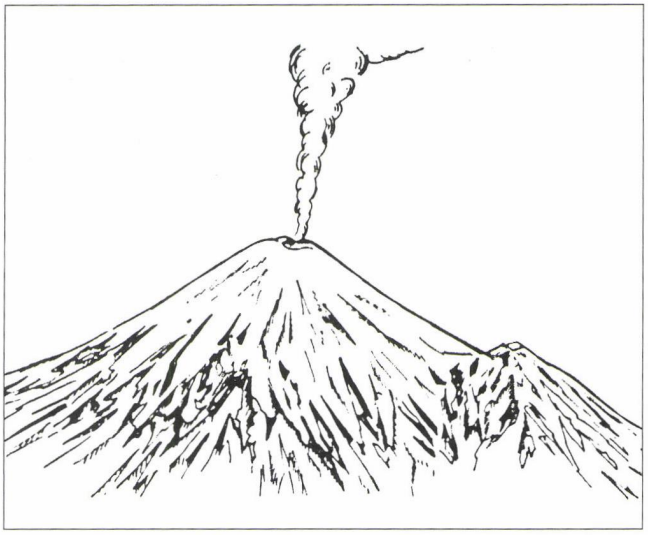
四代目の妙高の活動

最も若い四代目の妙高は、今から約四万年前に誕生しました。火山弾や火山灰を放出しては溶岩流を流すというような噴火が、数十年から数百年の間隔をおいて、およそ一万年ほどくり返されました。そして、ついには、標高三千メートル近い火山にまで成長したのです。そのころ、地球は、氷河期とよばれる寒い時期にあたっており、長野県の野尻湖では、私たちの遠い祖先にあたる旧石器人が、ナウマンゾウやオオツノシカといった獲物を狩って生活していたことがわかっています。野尻湖人たちは、四万年前の新しい妙高の誕生とその成長の様子を、湖畔からつぶさに眺めることができたにちがいありません。

噴火のくり返しによって三千メートル近く



4つの火山が縦に重なってできている妙高山


最も高かったころの妙高山（第Ⅲ活動期、約7万年前）

の山にまで成長した妙高は、その後、長い間めだった活動をしなくなります。ところが、今からおよそ二万年前、妙高は、長い沈黙を破って突然大爆発を起こしたのです。この時の噴火では、マグマは噴出されず、高圧のガスだけが爆発的に噴出されました。この爆発のショックで、当時の妙高の山頂部が粉砕され、想像を絶する巨大な岩なだれとなって、猛烈なスピードで流れ下っていきました。岩なだれの先端は、遠く高田平野まで達した証拠があります。この大爆発とそれに伴う山崩れによって、妙高の山頂部は、大きくえぐり取られた形となりました。そして、東に開いたU字形の大きなくぼ地、カルデラがつくられたのです。新井市の鴻ノ巣という高台に、一万数千年前の旧石器時代の遺跡があります。鴻ノ巣人が眺めた妙高は、二万年前の山崩れによって、山頂部分が大きくえぐり取られたままの妙高でした。それは、先の野尻湖人が見た妙高とも、現在私たちが見る妙高とも、全く違った姿の妙高だったことでしょう。

時代が移り、氷河期が終ると、それまでの寒かった気候も少しずつ暖かくなり、六千年前頃には逆に現在よりもむしろ暖かい気候になっていました。妙高の山麓では、旧石器人が姿を消し、代わって土器をつくることを知った縄文人たちが、生活していました。そんなある日、カルデラの真ん中で、妙高は長い眠りから覚めたかのように噴火を再開しました。中央火口丘である「妙高山」をつくるための噴火です。この時の噴火は、まず火山灰や火山弾を噴き出す激しい噴火ではじまりました。そして、カルデラの中に、一つの小山をつくっていきました。また、山麓へは、大規模な火砕流が何回も流れ下りました。爆発的な噴火がおさまると、今度は粘り気の大きい溶岩が、火口から大量に押し出されてきました。溶岩は、火口の周りに厚くたまって、真ん中の最も高い山「妙高山」をつくりあげたのです。「妙高山」の誕生によって、妙高火山の姿は、今とほとんど変らないものとなりました。

マグマを噴出した妙高の最後の大噴火は、今から約五千年前の縄文時代の中ごろに起こった火砕流の噴出でした。この時の火砕流は、「妙高山」の山頂付近から噴出され、北東へ約二十キロ離れた新井市まで到達しています。その後、妙高は、マグマの噴出を伴わない水蒸気爆発を何回かくり返しながら、今日に至っています。

妙高は噴火するか？

妙高は、これからも噴火をくり返すのでしょうか。それとも、もう二度と噴火することはないのでしょうか。人間に寿命があるように、火山にも寿命があります。妙高の一代目から三代目の一生は、だいたい数万年でした。今の四代目の妙高は、もう四万歳ですから、人間に例えたらさしずめ八十歳くらいの老人といってよいでしょう。また、人間がその一生の間に、身体の外見や働きが変っていくように、火山も、噴出物の性質や噴火のしかたが規則的に変化していくことがあります。

妙高の先代たちは、いずれも最初は黒っぽい石（ゲンブ岩）を噴出していましたが、やがて灰色の石（アンザン岩）を出すようになり、そして最後に白っぽい石（デイサイト）を噴出して一生を終えています。四代目の妙高も、はじめのころは黒っぽい石を噴出していましたが、六千年前と五千年前の噴火では、大量の白っぽい石を、火砕流や溶岩流として噴出しました。そして、もう五千年ものあいだ、大きな噴火をしていません。

このように、いまの妙高は、すでに平均寿命に達しており、歳相応に身体も弱ってきています。したがって、昔のような大きな噴火を何回もくり返す力は、もう残っていないかもしれません。しかし、南地獄谷での激しい噴気活動は、妙高がまだ確実に生きていることを示しています。長い間隔をおいて、忘れたころに噴火をくり返すということは、まだ十分可能でしょう。とくに、マグマの噴出を伴わない水蒸気爆発は、今後も起こる確率が大きいと考えられます。

妙高と私たちの生活

私たちの祖先は、はるか旧石器時代の昔から、妙高の山麓を生活の場として選び、妙高と深く関わって生きてきました。妙高は、いまの私たちと、具体的にどのような関係をもっているのでしょうか。

火山は、噴火によって、さまざまな災害をもたらします。ときには、一つの都市を一瞬にして消滅させてしまうことも可能です。また、平時でも、地震や降雨に伴う山崩れや泥流が、ほかの山より発生しやすいという弱点を抱えています。

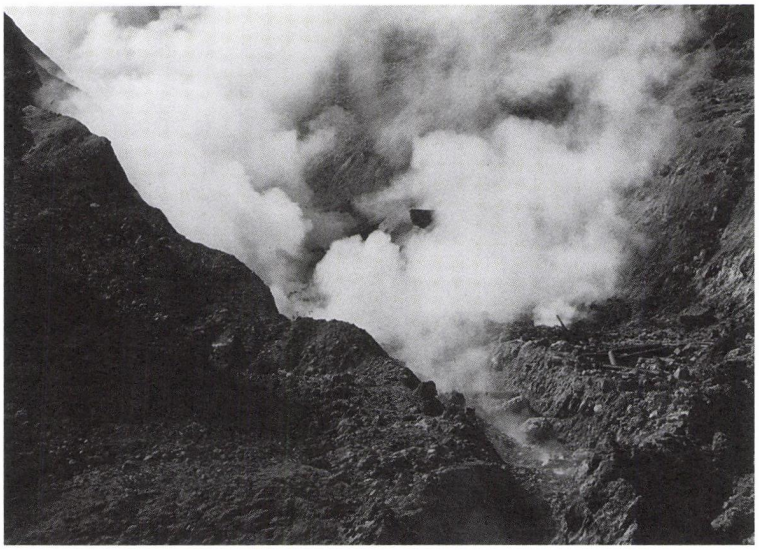


縄文の里を襲う火砕流
（大口昭治氏画）

妙高も火山である以上、噴火や山崩れなどに伴う災害は、当然、考えておかなくてはなりません。それが、火山の山麓に生活する者の宿命でもあります。行政の指導的立場にある人や防災関係者には、妙高が噴火した場合の心構えを、常にもっていてほしいと思います。しかし、私たち一般市民は、今のところそれほど神経質になる必要はありません。妙高の場合、噴火による災害は、私たちの祖先である旧石器人や縄文人が私たちに代わって受けてくれ、私たちには、妙高の恵みの方がはるかに多く残された感があります。

四季おりおりの美しい景観と豊富な温泉、これらは、もちろん、火山としての妙高が生み出してくれたものにほかなりません。スキー場として利用されている見事なスロープも、火山ならではのものです。このほかにも、妙高は、さまざまなものを私たちに与えてくれています。なだらかで広大な山麓は、昔から今日にいたるまで、たくさんの人々の生活の舞台となってきました。なにげなく生活している大地そのものが、妙高の産み落としてくれたものであり、妙高からの贈り物なのです。

水資源の源としての妙高の役割も忘れることはできません。雪解け水や雨水は、スポンジのような吸水作用のある妙高の山体に一度貯えられた後、関川や矢代川によって、また地下水となって、山麓はもとより遠く高田平野まで運ばれていきます。これらの水は、田



南地獄谷の噴気活動
耳をつんざく噴気音と鼻をつく強い刺激臭が、妙高が活火山であることを実感させてくれます。

畑をうるおし、工業や発電用として使われるほか、最近では街路の消雪用としても重宝されています。また、大昔の噴火で、広い地域に降り積もった火山灰は、現在、作物を育てる土壌となり、これらの地域の農業に大きな影響を与えています。

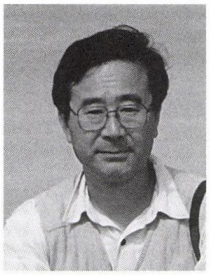
私たちの精神活動に及ぼす妙高の影響も、決して無視できないでしょう。もしかすると、文化・伝統の〝遺伝子〟に組み込まれた形で、私たちの心や行動に影響を与えているかもしれません。このように、私たちの気づかないところでも、妙高は、私たちと深く関わっている可能性があります。

私たちが生まれたとき、妙高はそこにありました。私たちがいなくなっても、妙高はそこにあるでしょう。私たちの足下の大地には、妙高の歴史を刻む地層が横たわり、その中に妙高と深く関わって生きてきた先人たちの足跡が重なっています。いつの日か、私たちの上を、新しい時代の新しい人たちが、私たちと似たような夢や悩みを抱いて通り過ぎていくのでしょう。

■付 私の妙高研究

火山の研究には、いろんな分野があります。噴火の予知もそのひとつです。どのような研究をおこなうにしても、まずそこにある一つひとつの火山が、どのような性質や生い立ちをもっているのかを知らなくてはなりません。しかし、火山国といわれる日本においても、火山学の基礎をなすべき個々の火山についての調査・研究は驚くほど不足しており、その形成過程が詳しく解明されている火山は、ほんの数えるほどしかありません。その理由の一つは、火山の生い立ちを調べる作業には、たいへんな労力と時間がかかることにあります。少なくとも数年から場合によっては数十年という時間を費やしての山歩きを、覚悟しなくてはなりません。その間、さしたる業績も期待できませんし、調査費なども得にくい状況にあります。このような割の合わない分野であるからこそ、今まで多くの人が敬遠してきたわけです。

私は、大学での卒業研究以来、妙高（火山群）にこだわって、その調査・研究をおこなってきました。三十数年を費やして、ようやく肉体労働を主とする作業はほぼ終了しました。その結果、今回お話したようなことをはじめ、妙高という火山の実体が見えはじめてきました。あと残っているのは、化学分析や年代測定などのお金のかかる分野と、なぜそうなるのかという頭を使う分野です。十年以内をメドに、ライフワークのまとめをおこないたいと思っています。



京都大学大学院修了
理学博士
秩父宮記念学術賞受賞
妙高火山研究所主宰



さかづめ よしひろ
1946年（S 21）上越市黒井に生まれる
直江津高校・青山学院大学卒

坂詰吉寛さん
上越コンピュータサービス社長

昭和四十七年大学を卒業してコンピュータソフト会社への就職を振り出しに、まだ「情報工学」などという言葉さえなかった世界に踏み込む。

しかし、長男なら家を継ぐのが当たり前の時代、二十三年前に故郷へ。

帰って家業を継ごうと

家業の菓子屋をやろうと思った。自分で工場はこういうふうに、店名も「きょうと」って決めちゃって。富山とか長岡、新潟、長野へここを販売拠点にして……と、全部計画を立てた。上杉謙信のことを考えれば、結構攻めて行くのにいいとこなんですよね。

以前、シャトレーゼ（山梨県・清里の菓子チェーン店。三年前、山麓線に進出）の生産管理システムを作っていたんです。

ケーキを何個、何時、どのくらい作って、どこへ売り出そうか、どこへ店を作ろうか、ということです。品数少なくして、おいしいものを安く提供しようというのが社長の考えで、ここ二十年、成功してきている。関東とか東京には攻めていないんです。長野、名古屋、関西方面、新潟県には一つか二つしかないと思いますよ。武田信玄が攻められるところを大体攻めている。

ここが物流の拠点になるという意味で、地元にそのような菓子屋があってもおかしくない。なんでこの地区にそういう菓子屋がないのかっていうのが残念です。

菓子屋かコンピュータ屋か

こっちへ帰ってくるとき、周りがみんな「菓子屋なんか止めて、コンピュータをやれ、その方がこれから伸びる」と言うんで、犀潟鉄工の伊倉社長の支援で、共同出資でこの会社作ったんです。三年半、社長をやっていただいた。そして、「おれも歳を取ったし」ということで、私が全部譲り受けたという経緯があるんです。

逆に菓子屋やってた方がもっと伸びていたんじゃないかと思っていますよ。自分も安くて美味しい菓子を作ろうと思っていた。

だって、勉強なんて家でしたことない。いつも家の手伝いですよ。菓子屋やっときゃよかったかもしれない。ま、そんな思いがありますよね。

そのとき、コンピュータやるのなら「東京」でという発想は無かった

全然なかった。ま、長男であるし、帰ってこなけりゃいけない。親を最終的に面倒見なけりゃならないし……。

でも「お前、東京にいれば、従業員も五～六百人くらいになっているよ」って、言われますよ。それは自分でも思いますよ。しかし、こういう企業の最初の時期でもあったしね。

それに、ようやく業界の団体が出来たくらいで、規制が何もない、その分競争が激しいけど、どこにいても技術を持っていれば伸びるチャンスはたくさんある。



■データ

上越コンピュータサービス株式会社
設　　立　1978年（S53）
本　　社　上越市黒井
資 本 金　2000万円
関連会社　株式会社ジェーテック（本社・東京）
事　　業　コンピュータシステムを一括受注・開発・販売
取 引 先　ＮＥＣ・ＮＥＣグループ、鹿島・鹿島グループ等
　　現在、イトーヨーカ堂のＰＯＳシステム等を開発中

この地域にいるデメリットはない

最終的には、逆に向こうからお客様に来ていただきたい。そのために、ソフト屋がまだやっていない、「ソフトの研究所」を作りたい。うちには、それだけの知識と人材を、時間をかけて育てている。

しかし「育てる」と言う意味では、こういう業界をもっと育てて欲しい。具体的に形になって現れないものには投資しない。こういう業界に思いきって支援して欲しいですね。

地域に思うこと

そりゃ、もう直江津に愛着心ありますよ。だから、企業やそのまちを育てたいって言うんだったら、地域の情報をお互いに交換し合うことが必要だし、その情報を共有することが必要だ。そういうことで、何か地域に貢献したい。

まずやりたいことは、「数学大好き人間」の私としては、この地域の子どもたちを集めて、算数とか数学に興味ある連中を教えていきたい。数学は哲学なんですよ。だからそこから人を育てたい。コンピュータを活用して……。

そうしないとなかなか人が育たない。

我々の年代以下の優秀な連中は、みんな東京へ行っちゃっている。だから、首都圏周辺の子どもたちの偏差値が非常に高い。

地域の減少する人口の歯止めをしなきゃいけない。それには人を育てなければならない。いま生まれた子どもを……。

家庭において、地域において、小さいときどのようにして育ってきたか、人間に対して愛情を持つとか、だいたいみんな「見よう見真似」で育って来たんですよね。だから、いろんな知識のある人、歳とっていろいろな知恵のある人、そういう人たちで子どもを育てるシステムができれば、地域に人の輪がなしてきますよ。そういう仕組みのなかで育てば、環境とかゴミとかいう地域の弊害も解決の方向が見えてくると思う。

そういうところには人が人を呼んで、いい人が集まってくるし、そうすれば、まちなみも変わってくる。

先を見て今を見ることだと思いますね。過去を慕っていてもしょうがない。先を見て今を変えて行くしかしょうがないんだよね。変化は常なる道、「変化こそ常道」だと思いますよ。

インタビューを終えて

じつは、インタビューの半分を費やしてソフトやシステムについて語ってくれたのだが、ちんぷんかんぷんの横文字の氾濫を想像していた私たちに、ほとんど日本語で語ってくれた。

これは、高校時代「休み時間に遊びとして数学の問題を解いていた」という氏が、視野の狭い単なる「数学大好き人間」ではなく、コンピュータの説明の中で語ってくれた「ものごとを曖昧な形ではなく、その原理原則を明確にすること」を学び取り、そこから社会の仕組みやものの見方を学んだ人だから出来ることなのだと思った。（取材／山田・佐藤）

フリースペース・

茶室見学ノート

石痩庵

せきそうあん

佐藤昭夫さとうあきお

本稿は、前号の平丸氏の投稿を受けてのものである。

一般家庭の茶席を見学する機会は、そうざらにあるものでなく、人伝に頼みこんでやっと見せてもらう。しかも、寸尺を取るとなると大変で、新しい茶席では仮に御亭主から許しを得ても、茶席を作った大工さんからは、なかなか許可がでない。一流の大工になればなるほど難しいようである。

さて計る段になっても、日頃大事に大事にされ、磨き込まれた柱や鴨居にスチールの物差しを当て、狭い部屋をうろうろし、床の中まで入っての作業に、御亭主はどのようなお気持ちでおられるかを思うと、気の重い事はなはだしい。そのようななかで、ご随意にと奥へ引き込まれる亭主に出会うと、大きな喜びと共にホッとする。

前置きが長くなってしまったが、快く実測させて貰えるという事は有り難い。

北陸線の終点直江津駅を降りると、駅前に明治の建築を思わせる、平面六角・木造三階建の塔が附いた古風な旅館がある。ここが今回の見学場所である。

＊

上記は昭和五十一年十月一日京都林泉協会発行「林泉」二百八十号に掲載した見学記の冒頭部で、同年七月二十六日に実測調査した直後に記したものである。

当時の「いかや」さんの三重の塔は、直江津駅前を象徴する風景であった。

石痩庵主荻野惣次郎氏にお近付きさせて頂いた切掛けは、茶席用の金具を京都で御世話した事があってからで、以後も金具や茶席用の壁土などをお送りするたびに、巻紙の丁重な御礼状をいただいた。今では我が家の家宝になっている。

このような訳で、茶席の実測調査もお許しが出て、実測する事ができたのであった。

茶席「石痩庵」

所在地　上越市中央一丁目・直江津駅前

ホテルセンチュリーイカヤのロビーから新館への長い渡り廊下の北側に、五百坪程の庭園がある。東西に長手の庭園には、西に池泉庭、東部に枯山水庭があり、その枯山水庭園に「石痩庵」はある。

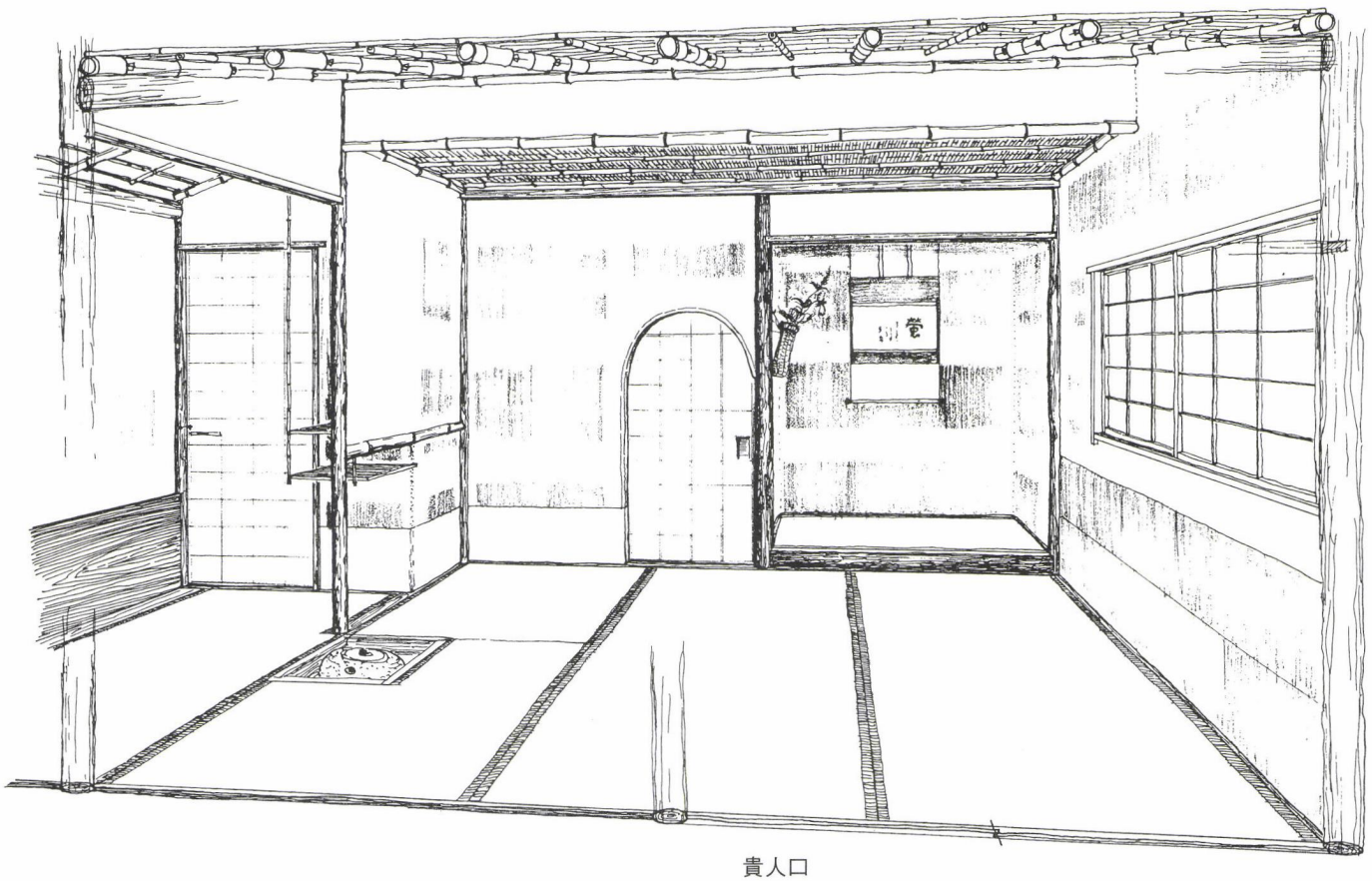
茶席は渡り廊下に添うように建てられていて、その東に少し離れて腰掛待合が廊下と平行に設けられている。（現在は撤去されている）。ロビー奥横の和室、「いかごん」から移築された御座敷の縁から庭に降りると、左手に腰掛待合、その奥に石痩庵が見える。大きい目の飛石を渡り中門を入ると、内露地は小ぶりの飛石になり、右手の蹲踞へ、また正面の貴人口へと続いている。

外観は、間口一間半を瓦葺切妻屋根とし、左に点前座となる半間の下屋を附け、正面妻側一間半一杯に庇を附ける。下屋と庇は銅板の一文字葺。妻上部に円形の扁額「石痩庵」を掛ける。軒内の土間と建物全体が、廻りの地面より八寸程盛り土され、その上に茶席が建てられている。雪解け水への対策かと思われる。茶席への入口は躙口でなく、障子引き違いにして貴人口とする。左手には大き目の下地窓があり、力竹が添えられている。さらに左上にも下地窓がある。庇屋根の上部の妻に、格子の入った連子窓がある。外壁足元の壁止めには竹がいれられ、その下は差し石が据えられている。

貴人口の障子を開け、敷居に両手をつき、室内を窺う。正面に床の間、左に給仕口、さらに左に中柱があり、点前座がみえる。壁は錆びて、貫跡が美しい。（スケッチ図参照）

では間取りから順に見てみよう。

間取り　三畳台目の席で、点前座台目畳の脇に小板をいれる。点前座の正面は茶道口で、開きの襖を開けると板の間の水屋があり、すぐ左に簀子の流し、棚、炭溜などを設ける。右へ廻ると畳敷きで、広さは三畳台目である



貴人口

石痩庵　室内スケッチ

貴人口を開けて室内を拝見している様子を描いたもので、実測当日は床の間に不昧侯の「螢」、床柱の掛花には鉈籠に螢袋が生けてあった。床の間の左は花頭の給仕口、壁があって中柱と釣棚、その左に茶道口が見える。

※このスケッチに炉を描いたが、季節は風炉の頃であり、炉の位置を示すために書き込んでいる。念のため。

が、畳は五枚に分けて敷いている。渡り廊下側に、障子引き違いの勝手口があり、また丸炉、配膳棚などが設けられていて、茶事に便利なようにできている。三畳台目席の点前座正面に茶道口がある平面は、京都の表千家茶室「不審庵」と同じであるが、水屋との位置関係を見ると、現在の不審庵と違っている。不審庵は天明の大火に焼け、さらに明治三十八年にも焼失してしまっている。石痩庵は、明治焼失以前の間取りを手本としている。

畳　三畳台目席の畳は四枚とも京間（本間）畳が入れられている。ちなみに、京間畳とは長さ六尺三寸幅三尺一寸五分あり、長さと幅は二対一になっている。茶席を含めた数寄屋や京都の町屋建築は、畳を基準に平面計画されていて、畳を何処へいれても入るようになっている。現在の直江津では柱を六尺とか十二尺に、先に立てるから畳の寸法はまちまちになる。おおよそ長さ五尺八寸幅二尺九寸で、長さにおいては五寸の差があり、八畳間では一尺（三十センチ）も京間が大きいことになる。茶湯の作法や茶道具は京間畳を基準にできているので、茶室の畳は京間畳にするのが当り前になっている。また台目畳とは、一畳分の畳から台子の幅だけ取り去った長さの畳をいい、おおよそ四尺七寸二分になる。石痩庵もそのようになっている。

天井　床の間寄りは蒲張りに白竹三本で押えた平天井。高さは蒲まで六尺一寸五分。床間うちは杉中杢板の鏡張り、高さ六尺二寸。貴人口側はヘギ板張り化粧屋根裏の掛込天井で、中ほどに明り取りの天窓を設けている。本来は突き上げ窓にして、空が見えるようにしたいところであるが、雪国仕様とでもいうか上は屋根裏で、妻の連子窓から明かりを取り入れている。大変珍しいのは竹垂木で、普通枝

付きを上下にするのであるが、ここでは左右にして横に枝が出るように使っている。桁の高さ五尺七寸二分。点前座も掛け込み天井になっていて、桁の高さは五尺六寸。

貴人口　間口四尺六寸二分、高さ四尺二寸一分。不審庵では躙口となっている所で、ここでは壁付きの右の障子戸に当る。不審庵の場合は、躙口の板戸を開けると、床の間が真正面にあって、かなりの緊張感がある。ここでは入口が部屋の中央寄りになっていて、床の間から給仕口、それに続く壁と、見える範囲が広くなり、不審庵のような高まりは無いが、和らいだ雰囲気になっている。ただ、障子を開けると、目の前から床に向かって畳の縁があるが、これは遠州の好みで、千家関係の茶席には殆どなく、珍しい手法といえる。

床の間　間口四尺四寸五分、落掛の高さ五尺一寸二分、深さ二尺六寸、天井高六尺二寸で、廻り縁から二寸下がりに竹の掛物釘を一本打つ。中釘は三尺五寸七分の高さに無双釘を打つ。床柱は末口二寸六分程の、やや細目の赤松皮付丸太、畳から四尺の高さに花掛釘を打つ。床框も赤松の皮付丸太で、セイは二寸五分五厘。床柱と床框が同じ材というのは珍しい。相手柱は桧のアテ丸太。壁は、奥の柱を見せない、塗り廻し壁になっている。

給仕口　床柱の左に付い花頭口で、間口二尺五分、高さ四尺。太鼓襖の組子は縦三本、横九本で引手は内外共五段目にある。また引手の幅は縦組子一ぱいに作るが普通であるが、半分にして縦長にしたのは珍しい。

中柱附近　中柱は径一寸八分程のエンジュ小丸太の直材を使い、二尺四寸五分の高さに、袋掛釘を打つ。奥隅の柱との間の壁止めの引木は、畳から二尺一寸三分高に白竹を入れる。その壁の点前座側に二重の釣棚を付ける。下の棚が引竹より下に見えているが、これは利休流の特徴である。

点前座と茶道口　点前座は、台目畳と幅三寸五分の小板をいれ、不審庵よりは狭いが幅を広くしている。茶道口は方立口で、間口二尺六分、高さは四尺九寸二分、鴨居上部は不審庵のように吹き抜けとせず壁とする。そのためか、内法の高さを低目にしている。襖は点前座側からみて右釣り元で、水屋のほうへ開き、開けても自然に閉るように調整してある。引手は付けず、代りに点前座側に掛金が取りつけてある。この点前座と茶道口との関係は、不審庵独特のもので、他では見られない。（石瘦庵では便宜上〝さる〟が付いている）

壁　土壁を中塗で仕上げている。錆が適当にでて、貫跡も良く美しくでている。なかなかこのようには行かないもので、よほど土を吟味したものと思われる。壁チリは約七分、柱が二寸七分であるから壁厚は一寸二、三分になる。壁の厚みを薄く仕上げるには、大工と左官の腕の見せどころで、中柱の袖壁は特に難しいが、良くできている。

腰張り　客座は鉄紺の湊紙の二段貼り、高さ一尺七寸七分。給仕口から茶道口にかけては白の美濃紙貼りで高さ九寸。点前座の後ろと小板側は、赤杉の中杢板を横にして張り、高さ一尺三寸八分。点前座後ろの隅柱の二尺三寸五分高に、羽箒掛の折釘を打つ。

以上簡単であるが寸法を含めて記したが、「写し」といっても完全な写しという物は有り得ない。そこに亭主の好みの寸法や材の見立て、また大工の癖などが入り込んで本歌とは別物になる。同寸同材での写しをたまたま見受けるが、ただ綺麗なだけで力の弱い作品になってしまう方が多い。その点ではこの席は成功している。

なお、実測中に色々解らない事があったのでお尋ねしたところ、自筆の「茶室の覚書」墨書を頂戴した。今、そのままを参考のために記す。

一、茶室の施主　　柏崎市中浜
　　内山熊八郎氏
　清水組本社の専務理事をした方
　昭和十一年二月死去
一、茶室の設計は　小熊謙三氏
　内山熊八郎氏の書生として入り
　昭和七年より設計を始めた
一、茶室は昭和九年完成した
一、技師長は清水組の大友弘氏
一、大工は清水組専属川崎氏
一、材木は全部篠田銘木店より取寄
　（尚、竹垂木は佐渡の竹を使用した、
　と口頭で御聞きした）

不審庵型の茶席では、炉の季節は点前座で茶を点てられるが、風炉の時は点前座から客座側に出た一畳が点前座となる。

実測が終ってしばらくして、実測図をお届した時、たぶん十月中ごろかと思うが、「まあまあ茶室へ」とご案内を受け、薄茶を頂いたことがあった。その時は板風炉の点前であったから、当然手前座から出た畳で御点前をされた。道具を全部運び入れた後、茶道口前に座って、襖を止めてあった建水を席内へ取込むと襖は静かに閉り、掛金を掛けて御点前が始まった。緊張の瞬間であった。

京都・山水堂にて

■プロフィール
上越市（旧直江津市）出身。佐藤昭夫建築設計室主宰。
数寄屋建築研究家。
五智国分寺本堂設計者。京都市在住。

●なおえつ信金倶楽部講演会＜抄録＞

「生活に潤いを」

地元の文化を大切に

講師・小林新治



こばやし しんじ
上越市五智に生まれる。
中学校教諭、新潟県美術博物館学芸課長、館長を歴任。
平成６年より上越市立総合博物館長。

＊本稿は平成13年３月に行われた、なおえつ信金倶楽部総会での講演の抄録である。写真は編集部。

ただ今紹介いただきました小林でございます。満七十歳になります。

教員生活が主でしたが、途中で美術博物館勤務があり、そこでいろいろな人との出会いや多角的な体験を通して感じたことを元にして話したいと思います。

世界で識字率が一番高いのは日本だそうです。義務教育を終えて、どんな職場に入っても基本的なマニュアルをほとんどの人が読めるという国は、世界のどこにもありません。明治以降、学校教育が非常に成功したといわれるゆえんの一つです。つまり、知識や技術を基本とした均一で優秀な労働力を作ったという点で、成功したと言えます。今日の物的豊かさはこの点に負うことが多いことは確かです。

しかし一方で大切なものを失いました。知識の量的拡大にのみ力を注いだために、物事を深く考える力や、感性レベルで対象に接するという教育をおろそかにしてきました。つまり本当の意味のサイエンス教育や、美的情操の面がおろそかになりました。

皆さんは、神社やお寺の境内などで蝉の幼虫が土から出たあとの穴をご覧になったことがあると思います。幼虫は掘ったベトをいったいどこへやったのでしょうか。これは単純な理科の問題ですが、かつて私が教育現場で指導主事をやっていた時、新任の理科の先生たちの研修でこの問題を取り上げて聞いたことがありますが、だれ一人として正解者はありませんでした。この答えはファーブルの昆虫記にありますが、こんな問題を理科の時間で扱うと、とても時間がかかってしまうのです。日本の理科教育はいつの間にか、理屈で教えて効率的に結果を急ぐ教育になってしまったのです。蝉の穴を見て、掘った土をいったいどこへやったのだろうか――と時間をかけて考え込む気力・活力が失われました。これは理科教育だけでなく、今日の学校教育全般に言えることです。

こんな状況の中で、豊かな人間性への教育が衰退してしまいました。

昔は（少なくても戦前までは）物質的・経済的には貧しかったけれども「人間性」の豊かさは今日に比べてありました。それは家庭や地域の持っていたすばらしい力によるものでした。言い換えれば地域社会固有の共通財産としての「文化」でした。その土壌の上に花開いたのが戦前までの学校教育でした。それが戦後、家庭や地域の教育機能が無視されて、教育はすべて学校で分業的に行えばいいということになってしまいました。その付けが今日の「教育不毛」現象を起こしているのかもしれません。

かつて、私たちの親父やお袋たちは物質的には貧しい生活をしていました。ある意味では日本全体がそうでした。貧乏からの脱出が私たちのあい言葉でした。進学のための勉強もそのためでした。そしてその努力が今日の豊かさを生んだということも確かです。

しかし、物的に豊かになった今、心の貧しさが大きな問題になってきています。改めて教育は何のために――という問いがなされています。教育が幸せのための充電作用であるとするならばどこかに放電作用としての回路

がなければなりません。それは、物や知識だけでなく心の豊かさを含む「文化」でなければならない気がします。

今の教育は、端的にいえば教育のための教育で、目的がさだかでなく、閉ざされた回路の中で迷走しているのだと思います。

今こそ教育の膨大なエネルギーや経済力を文化につなげることだと思います。

戦後の私たちの目標は「文化国家」の建設でした。その方法論として教育・経済に力を注ぎましたが、結果は今のところうまくいかず、「文化国家」の実感は薄いと感じるのは私だけではないはずです。

話の前置きが長くなりましたが、物的な豊かさを獲得した私たちが、真に、生活に潤いを感じるためには一体何が一番大切なんでしょうか。それは、足もとをしっかり固め、地域や家庭の固有の文化的土壌を皆で作りあげることだと思います。

文化庁の調査によりますと、21世紀は文化的な土壌の貧弱な国や地方公共団体は経済的効果を生まないそうです。生まれ育った土地を愛し、そこの文化を育てることがこれからの私たちに課せられた課題です。

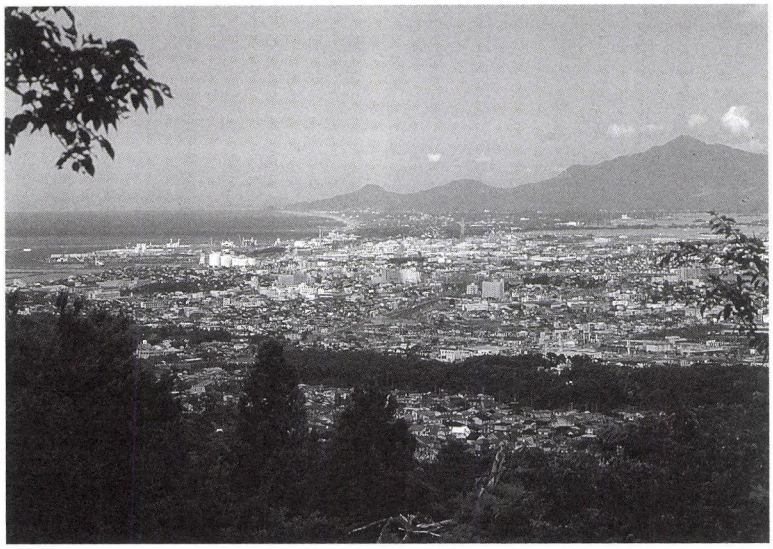
私は五智に生まれ、五智で育ちました。いい所だとつくづく思います。五智公園の展望台などに上ると頸城平野が一望できます。そこへ行って何時も口ずさむ歌が私にはあります。それは記紀の歌謡にある、ふるさと（国）讃歌です。昔は目に見える範囲が「国」でした。「倭（やまと）は国のまほろば　畳（たた）なづく青垣　山隠（やまごも）れる　倭しうるわし」という歌です。「まほろば」とは人情も含めた「豊饒の大地」と解釈しています。「倭は　国のまほろば」を、私は五智（もしくは頸城）は国のまほろば——と読み替えています。三方が垣根のような青い山に囲まれ、一方に海がある私たちのこの土地は、何と素敵な所か……と思うんです。皆さんもぜひそんな感懐でわがふるさとを実感してみてください。国を愛し、郷土に誇りを持つということは理性の問題でなく、柔軟な感性、ハートの問題ではないでしょうか。日々の生活に喜びを感じ、地元の文化を大切にするということは、つまりはこんな単純なことからの出発と言えます。



五智の景観

私は博物館に非常勤で勤めていますが、昨年花見会場で見たことですが、花が散り始めた頃、若い夫婦がよちよち歩きの子供と歩いていました。そこへハラハラと桜の花びらが落ちてきました。子供がそれを拾って珍しそうにその花びらを手にとって見ていましたがその母親も一緒になって子供としゃべっているんです。子供にとっては生まれて初めての外界との素敵な出会いです。しばらくして出会った、もう一組は逆で「あっ、ばっちい」といって子供の手を引っ張って立ち去りました。この二つの例はとても興味深い出来事でした。

今は理屈ばかりでものを子供に教えていますが、小さいときに親が子供の目線で子供の純粋な感性を大切にした接触が大切だと思います。そういう環境が蓄積されて大人になったとき、幅広い豊かな人間性がはぐくまれるのでしょう。そしてそういう感性が生活そのものを見つめ、豊かな文化に関心を持つ人間に育つのだと思います。



春日山から頸城平野を見る

先にもふれましたが、21世紀は、国でも地方公共団体でも、文化的なイメージが貧弱だと経済的にも潤わないそうです。その点、私たちのまち「直江津」はどうでしょうか。

親鸞上人上陸の地の五智、国分寺かいわいから春日山へと続くグリーン・ベルト地帯は本当に手付かずの自然がまだたくさん残っています。この自然と第二の自然ともいうべき「文化遺産」とをうまく組み合わせると本当にすばらしい場所になるのですが、残念ながら直江津地区には「文化遺産」の殿堂が少なすぎはしないでしょうか。

これからでも遅くはありません、この我らがまちに第二の自然としての「文化」をはぐくむことは私たちに課せられた課題だと思います。

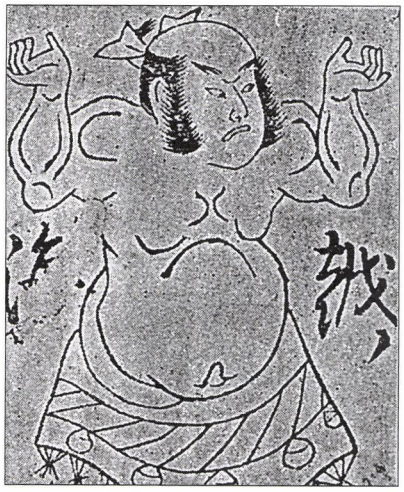
話を変えますが、小林古径は故郷に関してはあまり語っていません。明治以降あるいは戦後、ここから出ていった人達は青雲の志を抱いて出て行ったんですが、良し悪しは別にして、その成果が地元に帰って来ていないんです。小川未明しかりです。小川未明もあんなに有名なのに地元の人は無関心でした。従って小川未明も遺品は黒姫童話館に行っています。これは明治以降そういう歴史的な文化事情があって、小林古径もそうでした。最近小林古径顕彰会ができました。古径を故郷へ迎えようということなんです。そういう人たちをもういっぺん故郷へ呼び戻してきて顕彰する。それは私たちの心の栄養にもなり子どもたちの教育にもなるんじゃないかと思います。小林古径の作品も遅ればせながら集めて秋には展覧会を開く予定ですが、新幹線や高速道路ができてもビジネス以外でそこへ降りるには、文化的な施設がなければだめなんです。小林古径という人がいて、そこへ行こうと思わせる。そういう地域文化の発信を地域住民みんなでやる。これが経済的メリットも生んでくるし、巡り巡って地域の文化や住んでいる人たちの誇りにつながっていくんじゃないかと思います。

経済がなければ私たちの生活は成り立たちませんが、最初に申し上げましたように経済だけが独立してあっても意味がない。経済を文化という回路につなげない限り経済そのものも発展していかないし、目的のない経済活動というのは意味がないような気がします。

小さい子どもが散ってきた桜の花びらを珍しそうに眺めるということは、最高の文化なんです。私は年に一度は筵一枚持って海に落ちる夕日を見に行きます。できれば塩を付けたおにぎりを持って……。いいレストランへ行って飯を食べる。これもいいです。でもたまには塩を付けたおにぎりを持って日本海の落日を見に行こうという、家庭にそういう文化があったら素敵だと思います。夕日の落ちる十五分位というのは実にドラマチックで、これに親が感動してみせたら、子どもや孫の心のどこかに必ずインプットされる。

レストランへ行って美味しいものを食べる。これは文化です。でもこれはお金がなければできない。今、我々は両方共有できる時代に生まれているんです。しかしどちらかというとお金を掛けて楽しむというほうに傾斜しすぎてはいないか？　地域の忘れている文化をお互いに掘り起こすということが、今、大切なような気がいたします。

海西東陸



浅草の元鳥越（もとととりごえ）におりました柏戸宗五郎という関取が、越後路を巡業いたしました時に、ただいまの直江津でございます。福島弥兵衛という酒屋の丁稚で勇三、なりが五尺四寸いくらと申します。相撲取りになれるような体ではございませんのに、大変相撲が好きであります。あんまり相撲熱心だもんですから、柏戸が冗談半分に、

「どうだ、お前、そんなに相撲が好きなら弟子にしてやろうか」

こういったのが本当になってしまいまして、どうしても江戸へ連れてこなければならないようなことになった。

「決して稽古をつけちゃいけねえぞ、あんなりの者、稽古をつけて、もし腕や脚を折って怪我でもさせようもんなら仕様がねえから、決して稽古をつけるな、いいか」

固く言いつけておいたもんですから、誰も稽古をつけようという者がございません。

＊

芝の神明の境内で花相撲が始まりまして、親方は毎日弟子をつれては出かけて行きます。勇三は留守番ばかりです。とうとう我慢が出来なくなって、ある日そっと一人で相撲場へ行ってしまいます。ちょうど谷風梶之助が十人取りという稽古をつけておりました。

さて、この講談「寛政力士伝の内　越の海勇三」これからちょっとした展開があるのですが、紙面が足りません。

勇三、黄八丈の着物に本国織りの帯を巻帯にした人品のいいお年寄り、木村庄之助の後押しで土俵に上がってしまいます。ところが勇三めっぽう強い、谷風を負かしてしまいます。そこへ出てきた雷電為右衛門まで負けてしまい、慌てて花道を飛び出してきた師匠の柏戸も負かしてしまいます。

越後の国から出てまいりましたので越の海、名前をそのまま勇三、寛政年度の怪力士でございます。お客様が楽しみにしておりました。やっと土俵へ立つとすぐ相手をぶっ倒してしまう。あっけない相撲ばかり取っていたそうでございますが、なりが僅か五尺四寸しきゃない相撲取りでありながら、一年三月（みつき）の修行で番付へのっかる。大変早い出世でございます。

越の海勇三初めて土俵へ上がって、雷電谷風を悩ませました出世話の一部を僅かにまとめて終ることにいたします。

（お話はこのあと、柏戸が土俵で四海波に恥をかかされて憤死。越の海が四海波を破ってあだ討ち。その帰途闇討ちに遭い、雷電が四海波を土俵で投げ殺して、恨みをはらしてやる。と別立で続きます。）

＊

勇三、越前宰相のお抱え力士になっておりまして、福永十三郎のために、幕府への直訴の仲介の労を取り、めでたく、かつての主家へ恩を返すという「直江津今町　四（あ）十物出入（いものでいり）」の裏話は、寛政を待つこと三十年、宝暦十年（一七六〇）のことであります。

データ／越の海勇三　本名柴福松（後に勇三）
天明元年（一七八一）没。
初土俵宝暦九年三月、引退安永九年十月。
所属武蔵川→玉垣部屋。総取り組み数一〇九番、一三三勝。幕内最高位前頭筆頭（当時、人気だけの「看板力士」がはびこり、実力は大関であったが上がれなかったという事情があった）。
宝暦・明和・安永の強豪。稲川・千田川・艫綱とともに四天王といわれた。
情報源／ＮＨＫラジオ「話芸笑芸」
資料提供／財団法人日本相撲協会相撲博物館
速記提供／柳家小満ん（五代目神田伯龍口演速記本）

（洵）

■読書びと



諫早菖蒲日記

野呂邦暢著

文芸春秋刊
現在は文春文庫

あの醜悪な都庁舎の景観と相似形の思想で我が町の地図が塗替えられつつある今、自前の文学を持たぬ地域がいかに無力であるか痛感する。そして骨太に生きた或る男を憶う。

野呂邦暢（のろくにのぶ）……一九三七年に誕生し二十一年前の初夏に四十二歳で此の世を去った作家。『月山』の森敦と一緒に、自衛隊員の日常を綴った秀作『草のつるぎ』でA賞を受賞した。

死後刊行された、六十の掌編から成る散文詩のような自伝的エッセイ『小さな町にて』野呂はここで、叔父や早熟な友人達に導かれながら様々な本とであった青春のときを回顧する。〈ブッデンブローク家の人々〉〈足摺岬〉〈さざなみ軍記〉、もちろんフィリップの『小さき町にて』も……。高校卒業後、都会の短い暮らしと北海道での一冬の軍隊生活を経て郷里に戻り、家庭教師をしながら作家修業をする。

回想は、二十代も半ばを過ぎた野呂がJ・グリーンの『幻を追う人』（福永武彦訳）を読了し、暮れ方のラジオから流れるフォーレのシチリア舞曲を聞きながら「……文学という虚構の世界がまぎれもなく私の中に実在することを、その瞬間に感じた。私はうっすらと夕映えの色を残している空に目をやったまま、今度こそは終りまで小説を書けるだろうと思った。」と結ばれている。六十年代の地方都市に一人の作家が歩みを始めた。

〈小さな町〉とは九州長崎の諫早市のこと。海があり、町中を川が流れ、滅亡した伊佐早氏の廃城である中世以前の旧い山城跡を持つ。佐賀鍋島の支藩として一万石の城下は徹底的な経済的収奪を受ける。長崎、佐世保に次ぐ県下三番目の都市となっても、近来マスコミに喧伝されるまで人々の関心外におかれた町。我が直江の津に重なる彼の地より野呂は生涯静かなる発信をつづけた。

『諫早菖蒲日記』は一九七七年に上梓された野呂の数少ない歴史小説である。九州諫早藩の砲術指南の家の十五歳になる娘〈志津〉の目が見た安政二年（一八八五年）の初夏から冬にかけての日々を描く。幕末の時代の風は地方の小藩にも吹き渡るが、人々のそして家族の暮らしは地霊と共に異なる時を刻む。

大砲の音で轟同然の父、作平太の耳代りをつとめる志津が聞く、藩政の混乱と一家の苦境。旧き伊佐早の歴史を研究する父親とともに古城趾や神社の森を訪ね歩き、鯨捕りや雉子狩も目の当たりにする。そして志津を守る老僕吉爺との長閑やかな方言の会話がいとおしい。

少女の周りにおこる事件ともいえぬ様々な出来事を〈多感な青春〉などと括らない野呂、はるかな過去へ、そして今にひろがる郷里の景色に、時空を超えた生命の窮りへの確信を読み取りたい。

野呂が住まいした家主の老女が主人公志津の孫娘であったという縁で構想を結んだこの佳品が、別格血の通った趣に溢れるのもまた当然なのかもしれない。

一九七八年、諫早が生んだ伊東静雄の詩句〈自然は限りなく美しく永久に住民は貧窮してゐた〉に対するアンチテーゼとして計画された干潟干拓プロジェクトに、野呂は当時の市民の無関心を背景に、現在引き起こされている現象のすべてを予言するような暗喩に満ちた論述を張る。そして、「人が生きているように街も生きている。十年後の諫早をこの目で見とどけるのが、実は密かな愉しみである。」と記した。二年後に幽明界を異にした野呂の脳裏に、志津が山より移し替えた江戸菖蒲の原種〈諫早菖蒲〉の、華やかではないが野生の勁さを秘めた姿が映し出されていたような気がしてならない。

（瞋）

読者から

こういうものを待ってました！

山崎孝之

ＮＨＫ教育テレビに、「歴史みち　らくらくウオーキング」というとても面白い番組があります。四人の男女（医学博士もいる）が歴史にまつわる道を訪ねそこでいろんな人や物に出会い、また発見をしわくわくしながら気がついたら体も心も気持ちのいい状態になっているという内容です。ご覧になった方も多いとは思いますがまだのようでしたらぜひおすすめします。

こんなことを書いたのも「直江の津」の春号を読んでいると、やはり自分の足で歩いてしか見えてこない確かな視点で捉えた話に同じようなものを感じたからです。実にいいものが出来て春風が体の中をぬけていったおもいです。

自分の生まれ育った土地にこんな面白い人がいるんだ、あんなステキな場所があったんだとみんなが気付きそれを誇りにおもうようになればいいなあと思います。これからも、もっともっといろんなことを教えてください。

（上越市東雲町）



2001年4月22日　H.ハイマートから

直江津駅とその周辺の修景が完成し、四月二十二日グランドオープンのイベントが行われた。よくよく考えてみると、直江津がなぜ〝飛鳥（通り）〟でなければならないのか、という疑問がないわけではない。そして、強引とも思える圧倒的なテンションで支えられた波形のシェルター……。しかし、できてしまった景観をどのように自分の側に取込んで「自らのものにする」かは、まちのありようを見分ける能力を持った、市民の視線の置き所にあると言えよう。

駅前広場には、二人の作家による幸にして品の良いブロンズ彫刻が置かれている。このブロンズにまつわるちょっとした光景を見た。岡本作品の鳥をハトなのかカモメなのかと見つめている人、峯田作品によじのぼって少女のおっぱいに触ってみる子ども、夜には防波堤に作品とならんで腰掛けてたたずむ初老の男。街なかの彫刻の一つのあり方を早くも発揮しているのかもしれない。

信金倶楽部から

創刊号が思いのほか、いろいろな方々から反響があり、編集子も驚いている次第です。その中に発行者の「なおえつ信金倶楽部」とは何ぞや？　というお声もありましたので、お知らせ致します。ＰＲが行き届かなくて申しわけありませんでしたが、「なおえつ信金倶楽部」は、五年前に発足しております。

何かもう一つ元気の足りない最近の直江津を、かつて全国でも有数の政治・経済・文化の有力都市だった中世越後府中の面影を思い起こし、〈直江津学の探求、地域の経済・文化に貢献、会員同志の交流を深めて行こう〉と、企業を中心として発足した団体で、以来、講演会、法律相談、経済等に関する諸情報の提供、若年、女子従業員のセミナー開催などの活動をして来ました。

さらに、やや遅れをとっておりました文化活動の面では、発足五周年ということもあり、当会の事業趣旨にそって「直江津経済文化研究会」を立ち上げ、約一年近い構想期間を経て、季刊「直江の津」を創刊いたしました。直江津の経済・文化等のあらゆる面で古きをひもとき、現在を分析・研究し、地域社会の発展に幾分なりとも寄与できるものにしたいと考えております。また、せわしない昨今の日常の中で、少し気長に夢を追う面も持ちたいとも思っております。多くの読者の反響をいただき、ますます充実したものにしたいと考えておりますので、ご協力・ご参加を期待しております。

なお、「なおえつ信金倶楽部」への積極的なご加入をお待ちしております。

シンボ凧

榊原藩といえば、榊原康政を藩祖とする名門譜代の大名ですが、八代政岑（まさみね）の放蕩三昧を理由に、子の政永（まさなが）が寛保元年（一七四一）に姫路より高田へ移封されてしまいます。政永はこの時わずか七歳。八代将軍吉宗の時です。禄高の十五万石は姫路と変化はなかったものの、実収入は姫路時代の半分ともいわれ、極めて苦しい時代を迎えました。

この困窮を救ったのは十一代政令（まさのり）でした。在封十六年はもとより、江戸本所の別邸に隠居したあとも藩政を取り仕切り、赤倉温泉の開発など産業の振興に尽くす一方、徹底して質素倹約を訴え、家臣にはすすんで内職を奨励しました。

これによってそれまでは隠れるようにやっていた傘張りや盆提灯・曲物・凧づくりなどの内職に今度は正面切って励めるようになり、家臣たちの生活をおおいに潤しました。

なかでも、高田出身の洋画家・牧野虎雄の祖父・角馬（かくま）は、廃藩後も観世流の謡曲指南をしながら得意な絵の才能を生かして、一風変わった「シンボ凧」というものを作っていました。ここに示した凧は、彼の作と伝えるもので、当時巷では「凧絵は牧野のじいさんのに限る」と大評判であったとか。特に旧士族の子供たちが明治の中頃まで楽しんだと言われ、現在上越市立総合博物館に所蔵されています。

シンボ凧が初めて写真入りで紹介されたのは、昭和三十二年発行の『図説日本文化史大系第十巻江戸時代（下）』（小学館）ではないかと思います。渡辺慶一氏蔵として大石内蔵助を描いた「高田牧野のシンボダコ」が掲載されています。また、その後に同氏が著した『わがまちの歴史上越』（昭和五十七年・文一総合出版）にも同じ写真を使っておられますが、それらはどう見ても実物とは見えません。そこで直接渡辺先生に尋ねてみました。すると先生は「旧榊原藩士で高田中学の教諭をされた小倉右馬先生が自身の記憶を辿って描かれ、それを私が貰ったものである」と告げられたのです。この話を聞いて博物館所蔵の一点はもはや上越では疑う余地のない唯一の「実物」であるとの認識を強くしたのでした。昭和六十二年四月のことです。

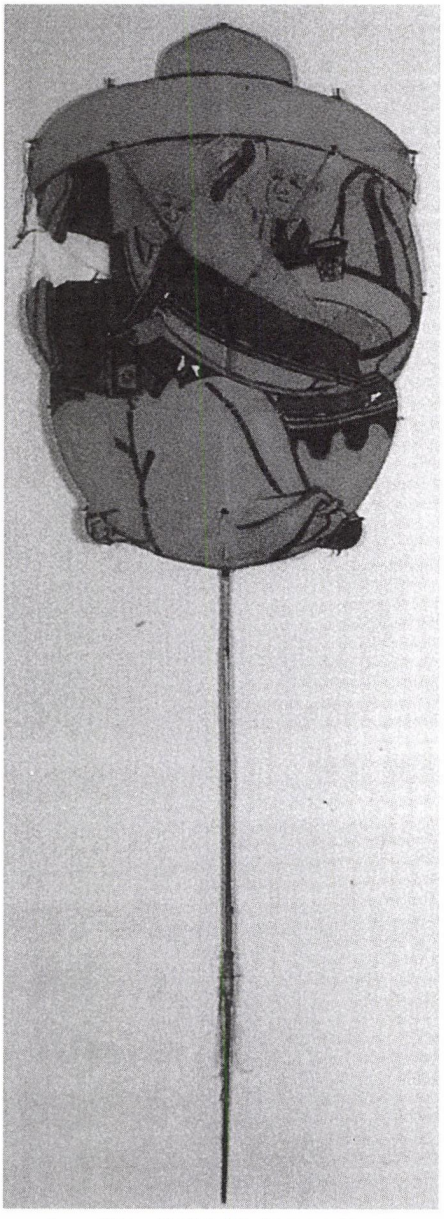
この凧絵は、流麗なタッチで観世流の「大瓶猩猩」（たいへいしょうじょう）という曲目に登場する赤装束の「猩猩」（酒の妖精）を描いています。シンボとは恐らく「芯棒」か「心棒」または「真棒」の意でしょう。確かに、これは単なる「凧」でしかありませんが、藩士の内職の実情を知ると同時に、作り手の当時の心境を想うと、なぜか愛しく、すごく貴重な一点のように思われてきます。



「小春」牧野虎雄

50.0 × 60.6 cm
1933 年(昭和 8 年)
上越市総合博物館蔵

まきの とらお
1890 年～ 1946 年
東京美術学校卒
帝展審査員
日本洋画界の先駆者として評価が高い



シンボ凧　牧野角馬（175 × 62 cm）

■池墻忠和（いけがきただかず）・上越市立博物館副館長■

■編集室から■

創刊号は、各方面から予期せぬ反響をいただいて、読者の期待と、先行き（？）への不安がひしひしと感じられた。これからも感想、忠告、提言をお寄せいただきたい。

さらに、この熱い反響が筆者に反映して、今号は文字がかなり多くなっている。

赤羽先生、坂詰氏の直江津への熱き提言は、ありがたい。

思わぬ出来事があったとはいえ第二号にして、発刊が遅れてご迷惑をおかけした。

多くの読者の投稿をお待ちしている。

訂正　創刊号8ページ「新片原町」とあるのは「新坂井町」の誤りでした。訂正します。

「直江の津」（季刊・第二号）
発行日／平成十三年六月二十日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市東町一－三
直振興業内
☎〇二五五（四五）〇二〇二
発行者／なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／（有）北越出版
責任者　佐藤和夫

投稿・内容などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
☎〇二五五（四三）九七一五
FAX〇二五五（四三）二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊 直江の津

発行／平成十三年六月二十日■発行所／直江津経済文化研究会■発行者／なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一六〇円)